

天文学とプラネタリウム

第104回

今月のお題

ドーム空間の可能性

アートイベントの中のドームスクリーン。空だけじゃないドームの可能性を垣間見ることができました。



www.tenpla.net



高梨直結 (東京大学)
平松正顕 (国立天文台チリ観測所)

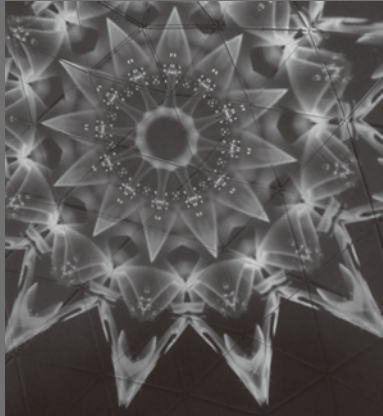
11月3日の文化の日をはさむ1週間、明治神宮外苑で開催された TOKYO DESIGNERS WEEK (以下、TDW)。プロ・アマ問わず様々なデザイナーが様々なものをデザインして一堂に会するこのイベント会場でひととき異彩を放っていたのは、特設の直径27メートルドーム「TDW DOME」でした。

筆者は11月3日に開催された映像作家さんと音楽家さんたちのトークショーに出かけてきました。コーディネーターは、多数のプロジェクトを統合して普通のプラネタリウムはもちろん東京ドームの天井にまで星空を投影してしまう高幣俊之さん。スピーカーは映像作家の馬場ふさ子さんと飯田将茂さん、オーロラ研究者の片岡龍峰さん、CGクリエイター中山弘敬さん、天文学者武田隆顕さん、そして音楽家の谷崎子トラさん、宮木朝子さん、林文彦さん。片岡さんは東京工業大学でオーロラの研究をしつつ「オーロラ 3D」というプロジェクトで全天周立体映像のオーロラを上映するプロジェクトを率いています。武田さんと中山さんは国立天文台に在籍されていた経験をお持ちですが、武田さ

んは研究者、中山さんはバリバリのクリエイター。やっぱり空を扱う天文学やオーロラはドーム空間との親和性が高いようです。

トークショーは、それぞれの映像作家さんと音楽家さんが作品に込めた思いを語った後に実際にその作品がドームに投影されました。馬場さんの作品は万華鏡を思い起こさせる、カラフルでアンビエントな CG 作品。片岡さんの作品はアラスカで撮影されたオーロラの実写映像、中山さんの作品は月探査機「かぐや」が取得した月面地形データを忠実に CG に起こしたものの、武田さんの作品は銀河衝突や大規模構造形成などの天文学シミュレーションを美しく見せたもの、飯田さんの作品はご本人が「ふしぎな、儀式的なもの」と表現されたように、ドームの周囲を不思議な人形が取り囲んで一心不乱に踊るようなふしぎな CG アニメーションでした。

筆者は昔からプラネタリウムに親しんできたのでドームスクリーンはごくごく「普通」に出会うことのできる存在だったわけですが、一般的な映像作家さんたちのトークで印象的だったのは、ドームスクリーンが観客を全方位から包み込めること、しかも TDW DOME は直径 27m と



馬場さんの作品の一場面。頭の真上に大きな花が開きます。

巨大なこともあって、新鮮な舞台に写ったということ。また今回登壇された皆さんが出会うきっかけとなったのが国立天文台の科学文化形成ユニットでの科学映像講座だったというのもうれしい限りです。プラネタリウム館では昔から「全天周映画」という形で空の世界に限らない様々な映像が上映されていますが、今後も大きな可能性がドームの中には詰まっているな、と感じる今回のイベントでした。